

兼良の古今伝授の方法と形成

——『古今三鳥剪纸伝授』本文考——

西野 強

中世における『古今集』注釈は、古今伝授や代々続く秘説などを受けなければならない。兼良は文明八年（一四七六）六月中旬に『古今集童蒙抄』とその前後に周辺の注釈書を成立させているが、その前に伝授書として『古今三鳥剪纸伝授』を成立させている。同書に見える表現方法から独自に古今伝授の世界を形成したことが窺え、その行為によって、当時の歌壇における『古今集』注釈の常識に対して、どのように対処したのかに及んで考察をする。

一 『古今三鳥剪纸伝授』について

『古今三鳥剪纸伝授』は武井和人氏によって多くの伝本が整理され、項目と配列によって十一類に分類された¹⁾。更に拙稿において三系統に大別し得た。これに従い述べるところで、中心とする伝本を各系統ごとに便宜上、仮に定めておけば、

寛正三年本系統 専修大学図書館蔵「古今集小切紙伝」(A/911・1/K43)

前期成立系統 内閣文庫蔵「古今三鳥剪纸伝授」(200・50) 第六類

後期成立系統 静嘉堂文庫蔵「古今集伝授^{冷泉}両家切紙又箱伝授」(518・18・22049) 第九類・甲

となり、引用にあたり適宜同系統の伝本を参照する。三系統の本文を比較すると寛正三年本系統となる専修大本を基にして第三者が本文を加え改めて前期・後期系統が成立したと考えられる¹³。伝本系統の根源として位置づけられる専修大本の奥書には、

右は御志深に依て懇に記進早

寛正三年孟春 兼良在判¹⁴

とあり、応仁の乱以前となる寛正三年（一四六二）正月、六十一歳の時に成立したことになる。拙稿にて、その信憑性を明らかにし、従来より仮託書と考えられていたが、兼良の著書と判断したところである¹⁵。したがって、専修大本には兼良が記した本文のみが伝えられていると考えられる。その項目と配列は（以下に通称とする項目名で示した）、

- ①二聖六歌仙伝序 ②二聖伝（人丸・赤人） ③六歌仙伝
- ④三木一草伝（識語1） ⑤切紙三鳥伝（識語2）
- ⑥三鳥伝（識語3） ⑦三鳥伝2 ⑧追加・都鳥の事 ⑨奥書

となる。さて、兼良の本文を伝える専修大本には、前期・後期系統の本文と比較すると文末表現に特異な異同が見受けられた。

専修大本	内閣文庫(前期)	備考
〈ならし〉 18例	〈なり〉 14例 終止形 3例	※残り1例は「いひつたへ」となる。
〈なるべし〉 15例	〈なり〉 7例 〈り(断定)〉 5例 〈いふ〉 3例	※異同ナシ 1例 ⁵⁾ ※後期に「秋はよふこ鳥春は百千鳥といふなるへし」と増益された本文あり。
〈とぞ〉 14例	削除 14例	

専修大本では〈ならし〉〈なるべし〉という表現が、伝本の成長に伴い殆どが断定調へと改められ、間接話法となる〈とぞ〉は全て削除される。更に専修大本には、以上の3語と似た意味を持つ、待遇表現となる〈待る〉6例、間接話法となる〈となむ〉2例・〈としるべし〉2例とあるが、前期・後期系統では全て削除されることから、偶然とは考え難い。本稿においては、専修大本に見える〈ならし〉〈なるべし〉〈とぞ〉の3例を取り上げ、以上の文末表現を駆使することで、まずは古今伝授の世界が形成されることについて述べたい。

二 〈ならし〉〈なるべし〉による効果

文末表現の中で、〈ならし〉は中世以前、他に類を見ないほど専修大本に多様されている。兼良は〈ならし〉を注釈書に、『伊勢物語愚見抄』の初稿本1例、再稿本2例、『花鳥余情』2例と用いた。前者の差は、『伊勢物語』六三

段の九十九髪（一四六〇）の歌注を、長祿四年（一四六〇）成立の初稿本で「源氏にかけける源内侍のすけのたぐひ也」とするが、文明六年（一四七四）成立の再稿本では自筆の冷泉家本に「源氏物語にかけける源内侍のすけのたくひならし」とある。九十九髪（一四七四）の老女が源内侍の準拠となることを指摘するが、密接な関係がある『花鳥余情』にはなく、再稿本の時に断定を避けたように思われる。専修大本にも人丸の「おほき三つの位」が三位か六位かの判断を「三つも六つも五音通つるならし」とするが、「（人丸は）地下なれば、くはしくしるしたる物なし」と自信のなさを窺わせる例がある。

その〈ならし〉は、〈なるらし〉の略、または〈なり〉の形容詞形と語源に二説あるが、判断し難い。意味は中世から近世にかけて混沌としていた。例として『耳底記』に

問、ならしといふてには、うたがひ歟。

答、うたがひにあらず、あるならしといふも、あるといふ心なり。

とし、光広の「うたがひ」という問に対し、幽齋が「ある」と断定的な意味として答え、解釈が混在していたことから窺われる。兼良の場合、『伊勢物語愚見抄』初段の注釈に

ついておもしろき事と思ひけん。

これよりは物語の作者の心也。中將事の次おもしろき事と思てかゝるすきわざをしけるならしといへる心也。とし、「けん」に対して「けるならし」とし、推量の助動詞「む」に対応する意味で考えていた。近世では、ほぼ〈なり〉と同意として盛んに用いられたのであるが、それに対して、宣長は『玉あられ』に「ものならし」の項目を立て、

近世人序の終は、かならずものならしとどちむる物とや心得たるらむ、そは此詞を、いかなる意と思へるにか、

いといと心得ず、物ならしは、俗語にへものであるといふ意也、然るにみづからいひたる事をさして、へ物であらうと、よそげにいひてよからんやは、

と断定を退け、自分ことながら推量とし他人事のようにする方法とする。兼良自身は推量として考えた例もあつたが、室町から近世に至る混沌とした中で、専修大本のへならしは後にへなりへに改められることを踏まえると、『耳底記』の幽齋の意見に近いように考えられる。だが、専修大本にはへなりへも本文中に混在することから、同等の意味としては扱えない。

そのへならしは、勅撰集の序文に使われる特徴がある。最初は『後拾遺集』に

いまのえらべるころはそれしかにはあらず、いにしへもいまもなさけある心ばせをばゆくすゑにもつたへむことをおもひてえらべるならし¹⁴

と自撰する行為を受けて用いられる。同様の例が『千載集』に「えらべるならし」、『新勅撰集』に「ことさらにあつめえらばるるならし」、『続古今集』に「このたびあらためとどむるならし」とある。また『千載集』には「かきあつめたてまつるべきみことのりをもうけたまはれるならし」とあり後白河院から撰集の勅命を受けたことに対して用いられる。他に『新古今集』には「ただこのみちならし」、『新葉集』に「ただ此歌の道ならし」と歌道を受ける。専修大本では『後拾遺集』などと同様の例として、

① されとも、実義にをひては伝有。その趣をあらへ記にかきのふるものならし。

② 其品へを則、奥に記し侍るものならし。

※以下、句読点などを付した。傍記に内閣文庫本の本文を付した。なお「・」は欠文を示す。

と自らが記す行為に用いている。へならしは序文のような公的な場で使用されたことから、山口明穂氏がへならら

し」の略を前提として、「愚秘抄」の例を踏まえ「特別な語として好まれた」とし、「序などの改まった文章に適合すると受け取られていたからに違いない⁽¹⁵⁾」と性格付けられた。意味は森野宗明氏が「推量」と「婉曲」の場合があるが、『後拾遺集』の例を「婉曲の用法のよい見本である」とし、

「婉曲」というのは、きつぱりと言いつ切るような口調を避けて、遠回しにやわらかく述べるのに用いられた場合をいう。⁽¹⁶⁾

とされる。『後拾遺集』と同様の例で〈ならし〉を用いる専修大本も右記の意味となる「婉曲」となる。だが、一方で推量ということも考えられ、専修大本の〈ならし〉を見ると、明らかに推量とならない例があり、

③ 『公卿補任』には五位以上をしるすによりて、此名なきならし。

④ 『狭衣』にあれば、大式三位の歌ならし。

と③は常識であり、④は「谷深くたつをたまきは我なれやおもふ思ひの朽てやみなん」と『狭衣物語』にある歌を受けてのことで、根拠が明確で断定すべきことであろう。一方で、「六歌仙伝」の項目に「歌仙」とであると判断する場合、遍昭が「哥仙ともいはさらめや」、業平が「哥仙たる事、意義あるへからす」とする以外には、

⑤ 『康秀』文者にして哥読は奇特なりとて…後代の康秀を哥仙とする事は、是康秀か和歌の妙ならし。

⑥ 『喜撰』喜撰は後に登天せりとして宇治の奥にも喜撰か嶽とてあり。歌仙といふもむへならし。

⑦ 『小町』物別、女官の歌よむは衣通姫より後には小町を以て第一とせり。とかく歌仙といふもことはりならし。

⑧ 『黒主』後に志賀明神とて神にいは、れし程の人なれば、哥仙といふもことはりならし。

とある。⑦⑧で「ことわり」を受けているように、

⑨ 二聖一人と習ふも此理ありならし。

と見える。それぞれが論じた結果を述べる際に用いているのは、自らの結論に対して、断定をするのであるが、謙退の意をこめて「婉曲」させたものと考えられる。その顕著な例として、二聖六歌仙を考えることについて、

⑩ そのうへ、只、二聖六歌仙を何とて『古今』につらねたるといふを知るか、これ哥道の本意世ならしとぞ。

と目的を宣言する。推量では解釈し難く、⑤～⑧⑩では傍記したとおり後に「なり」、⑨は「あり」と改められることを踏まえると断定の意味を含めて「ならし」を用いていると考えられる。だが、「ならし」とすることで婉曲され、語調がやわらく効果が顕れる。その目的は後述するが、読者に対する配慮となろう。したがって、専修大本に用いられた「ならし」は「なり」のような断定を避け「婉曲」させた意味があり、本文を成長させる時に「なり」へ改められたことから言えよう。

〈ならし〉は専修大本を離れると断定調となるように、「なるべし」も同じ過程を経ている。意味としては、荻生徂徠に『南留別志』があり、文末が大方〈なるべし〉で終わる教訓書であるが宝暦十一年（一七六一）五月に刊行するとき、弟子の宇佐美瀧水が記した序に「南留別志は、邦語の懸断けんたんの辭ことばなり」と懸断けんたんとして「根拠こんきょもなしにあてずっぽうで判断すること。臆断」(『日本国語大辞典第二版』小学館)の意味を当てていることから「なり」とは画するものであろう。

兼良の注釈書類に〈なるべし〉の例は多く、一例として『花鳥余情』初稿本に123例ある。専修大本との異同と同様の例が『花鳥余情』の伝本間にも見え、手習の「ひるのつかひの…とひき、たるなるへし」の注に初稿本が「使の人のき、たるなり」とし、再稿本が「使の人のき、たるなるへし」と見え、献上本で「使の人のき、たる也なり」となる。再稿本は被注文に「なるへし」とあることを受けるが、初稿本と献上本では〈なり〉と解釈する。そのような変化の

例は、あまり見受けられないのであるが、「なり」と「なるべし」との間に專修大本と前期・後期系統と同様の関係を見ることができる。

意味としては「なるべし」と用いられることで、『南留別志』序にあるような明解さに欠ける意識があつたと思われる。專修大本の「なるべし」を「をかたまの木」の項で見ると、

⑪ 玉木は、あまりに光る儀あれば、すこし光るといふ心にて小玉木といへり。そのをたま木に、をか玉の木と詞のたすけの「か」の字を入れて見るゆへに、猶くむつかしくなりて、其正躰を取うしなひて種々にいふ事なるへし。

とあり小玉木（おだまき）に助字「か」を入れるという複雑さがあること「ゆへに」、正体不明と濁して、明確な結論に至つてない。他には人丸像を老人の姿で描くことについて、

⑫ 像を老人の姿になしたるは、宿徳をあかめんしるしに侍りけん。かの老子は八十年母の胎にありしと云道理に任て、髪を白くして老子とよふ心なるへし。

と老子を例証にして「心なるへし」と結論付ける。業平について

⑬ 「好色も歌のなかたちとなれり」とは、此業平の事なるへしとそ。

と仮名序との関係を指摘し、その他に

⑭ 何れをも、ときは木をは、玉木とはいふなるへし。

⑮ しかあれば、何れにても、さか木の類をは、玉木とはいふなるへし。

⑯ 是は、朽木をよめるなるへし。

⑰ 玉くしの葉とよめは也。くしは、枝の心なるへし。

と注釈の結論を述べる時に用いている。しかし⑭⑮は「何れ」とし諸説混沌とした中で、自らの結論を出すことから⑩と同様の意味となろう。また⑰は「也」と共にあることから、重複を避ける為の処置とも考えられる。

以上の位置にある〈なるべし〉の意味について、荒木浩氏は、

著者が「他人事」のように客観的な位置とりで、自らの著述に対する「説明」を行って、ということであり、とりもなおさずそのことは、見てきたところに従えば、「説明」が、対象読者に向かつて、謙退の姿勢で、

丁寧な、「婉曲」の筆致が「客観的に」なされている故と推定できる。こゝした説明の言い回しは、「ならし」というかたちながら勅撰集序文にも見え（以下略）

とされた。なお、論証の過程において「古今集序」「そへ歌…なるべし」などを承けて、注釈の形に於いては、推量である側面よりも、むしろ、説明的な意味相の強い形も散見する」と注釈書の〈なるべし〉についても述べられている。更に同氏も指摘される^⑳ところで「源氏物語」の草子地にも見え、中野幸一氏が「説明的推量」として

何かについての説明を加える場合、きつぱりと断言しないで、多少の余裕を残して推量にとどめておくやり方で、このため自然の文章の角がとれ、文調にゆとりが生じて、読者への抵抗感も少なくなる。表現技巧の上から一種の間接叙法で、婉曲的な性格を含むものである。^㉑

とされる。兼良は『伊勢物語愚見抄』初稿本で五〇段の「あだくらべかたみにしけるおとこをんなのしのびありきしける事なるべし」に

あだなる事をばたがひにいひかはしたる男女の、しかも又ともにしのびありきしけるなるべし、と物語の作者の筆をくはへたる也

として〈なるべし〉の箇所を指摘する。既に、その方法を認識していたことから、専修大本の〈なるべし〉

は、荒木氏、中野氏が規定された意味で、「婉曲」として用いたと考えられ、読者に対する謙退を示す待遇表現となろう。

したがって、「へならし」と「なるべし」を文末に配することで、読者に対して配慮をする効果がある。それは「へならし」で示した、勅撰集の序文が撰者から天皇に対して記されるものであり、その関係の中で用いられた特殊な表現であることを踏まえると、専修大本も伝授書という性格上、兼良と伝授者（23）となる弟子との関係の中で強い断定を避けた「婉曲」の意味として意図的に「へならし」を用いたものと考えられるからである。

三 「へとぞ」の効果

専修大本以外では、全て削除された「へとぞ」の意味は、間接話法で、伝聞したことを示す表現となる。兼良は『古今集童蒙抄』にて

山さきより神なひのもりまでをくりに（巻八・三八八）

神なひの社は、大和国にあり。つくしへ下る人を、山さきよりやまとの神なひへをくるへさいはれなし。こ

れは山さきの西に同名の森ある也。今の世には、かうなひのもりといふとぞ。されとも、神なひとはよむへ（24）き也。

という用い方をしている。神南備の読み方について「今の世には、かうなひ」と読む一方で、兼良は「神なひ」と読むとして、一般説に「へとぞ」を用いて自説とを区別する。「へとぞ」が伝聞されたことを示す表現であることが窺える。専修大本には、

⑬当流の一伝といふは、人丸は：大和国葛城賀茂の郷に、その比、孔雀のごとくにして身に赤色ある雉子を得たり。其得たるころほひ、人丸その郷にて誕生有しとぞ。

⑭(為兼が喜撰歌として)『玉葉集』に入られたれば、御子左の家の衆は、笑種となせりとぞ。

とある。⑬の「当流」は「へとぞ」を置くことで一条流ではなく、兼良が受けた流派となり、⑭は御子左家が「笑種」とした伝承を示す。何れにしても伝聞となる。しかし、⑩の「これ哥道の本意ならしとぞ」や、小町について、弘法大師の『玉造り物語』(専修大本の表記)が小町ではないことを

⑮それをしゐて小野小町にするは、ひかことなりと思ふへしとぞ。

などは、主語が明確でないので、受けたことなのか、自説なのか判断が付きにくい。その「へとぞ」も『源氏物語』の草子地に用いられ、中野氏は意味を「伝聞」とし「今まで叙述してきた物語全体を語り伝えるたてまえとしたもの」とされた。兼良は「へとぞ」と草子地については『伊勢物語愚見抄』初稿本の九六段にて、

むくつけき事人ののろひ事はおふ物にやあらんおはぬ物にやあらん今こそ見めとぞいふなる

是よりは物語の作者の詞也。(以下略)

とあることから、前掲の「なるべし」と同様に、その方法は認識していたと思われる。専修大本において主語が明確でない「へとぞ」が師匠から相伝された説か否かは判断が付かないところであるが、既に認識のある草子地の方法を用いて、師匠から伝聞したという「たてまえ」にしたとも考えられる。とはいえ、「へとぞ」があることで、師匠から相伝されたことを読者に示すこととなる。それは東常縁と宗祇が文明三年に行つた古今伝授を纏めた『両度聞書』に例が見える。片桐洋一氏が近衛尚通本の仮名序注末尾の「説進候趣無相違 常縁判」によつて「すべて常縁の説で、宗祇はただそれをまとめただけ」とも捉えられるとされた。その痕跡として「間接話法的叙述の多いことに気づく」かれ

「〜とぞ」という伝聞の形をとっている所が随所に見られるのである」とされる指摘から考えられる。具体的に尚通本には〈とぞ〉が146例あり、〈なるべし〉も74例ある。〈ならし〉も序注に「仍、延喜の当代を今とさせるならし」と1例ある。この結果、『両度聞書』と専修大本と文末表現が同じことから、〈ならし〉〈なるべし〉〈とぞ〉が授受関係を示す表現と確認できる。

四 授受関係について——付、奥書の解釈

〈ならし〉〈なるべし〉が読者に配慮した謙退を示し、兼良の伝受者を意識させ、〈とぞ〉が相伝者となる師匠の存在を意識させ、これらの文末表現によって授受関係を形成した。専修大本の奥書にある寛正三年頃は『大乘院寺社雑事記』によれば、寛正二年十一月三日に「昨日二日太閤・関白御両所御参内、被談光源氏物語、室町殿同参内云々、連々可有御談義云々」と兼良と教房が『源氏物語』について連々と談義し、同様のことが同年十一月十日・同三年三月三十日にも行われている。前述したように『源氏物語』における草子地の方法は、この時に強く認識されたと思われる。また、兼良から息子となる教房へと古典学の継承が行われていたのである。となると、〈ならし〉〈なるべし〉を意識した相手、『古今三鳥剪紙伝授』を伝受したのは教房ではないかと考えられる。内容には「実義においては伝有。その趣をあら〜記のふるものならし」や「努々他見をいましむ穴賢」と伝受者に対する一文が見え伝授書であることわかる。その態度は奥書を解釈すると

右は（伝受者の）御志が深いことに依て、（私は）懇ろに記し（伝授書を）進らせ早。

と、伝受者に対して「御志」や「進（たてまつらせ）」と敬意を表す。これは〈ならし〉〈なるべし〉を多様する態度

に一致する。しかし、兼良は教房に対して、そのような態度を取るのでしょうか、という疑問がある。当時、兼良は関白を既に辞し、教房に譲っている。政治に加え、古典学も共に継承する時、息子とはいえ関白であることに對する敬意を表する為ではなからうか。兼良は晩年、將軍義尚に奏上した『權談治要』（文明十二年（一四八〇）七月廿八日）に謙退表現となる（へなるべし）⁽²⁸⁾が13例見え

樵夫も王道を談すといふハ：權談治要とはなづけ侍るものなるへし⁽²⁸⁾

と將軍に対して用いた。將軍と同様に重職である関白の教房を、寛正三年当時の兼良が文末表現を駆使し奥書でも敬意を表して、伝受させたと考えられるのである。

相伝者の場合、兼良には『梅庵古筆伝』に「自負才氣して歌学の師承なし」と見え、『後成恩寺禪閣行跡』にも

一 歌道相伝之儀

後京極攝政⁽²⁹⁾以来、代々相伝之、別無師範、但冷泉大納言持為卿為家礼、有通志之事⁽³⁰⁾

とあり、冷泉持為が相伝者となりそうであるが「家礼」であり、傍線で示したように師匠は存在しないと記される。

また持為は寛正三年の八年前となる享徳三年（一四五四）に既に薨じている。師匠不在の影響は『東野州聞書』に

宝徳二年十一月三日、（中略）今度仙洞⁽³¹⁾においての御歌合、一条殿⁽³²⁾時、飛鳥井中納言入道判也。（中略）今の世

には、かやうにひろく物を見しらん事あるべからず。誠に天下の御たからと申され候と、和歌の道の御口伝のなき事を法印歎申しなり。⁽³¹⁾

と『宝徳二年（一四五〇）十一月仙洞歌合』での出来事が物語られており、「法印」とある堯孝が歎いている。この時、兼良に對抗して判者となる飛鳥井雅世（祐雅）の子、雅親（栄雅）は、寛正期歌壇で指導的立場に立つ⁽³²⁾。その中で、寛正三年に専修大本が成立するのは意味があるろう。それは後に『古今集』注釈をする時も『古今集童蒙抄』を受

けて成立した『古今集秘抄』の奥書に「古今集之釈、以相伝秘説」と見える。しかし、赤瀬信吾氏は、『童蒙抄』に度々出てくる宗匠家や秘事口伝に対する批判的姿勢を『秘抄』が表現を後退させたことを明らかにされ、

宗匠家からの反発や、相伝の有無によつてものごとの軽重を判断した当時の風潮とかを考慮してのこと、つまりは、これも兼良の慎重な態度の現れとして理解しうるかもしれない。³³

と指摘されている。したがつて、兼良にとつて当時の歌壇における常識となる師匠の存在に対して、専修大本に見える〈とぞ〉によつて師匠を偽装して対処したと考えられる。

五 本文の成長による二面性——まとめにかえて

兼良が駆使した文末表現は、専修大本から成長することで、第三者に一掃された。それが何を意味させるのであろうか。まず、〈とぞ〉は全て削除されることで、兼良が作り上げた師匠の存在が消える。伝受者に謙退を表す〈ならし〉〈なるべし〉は〈なり〉などの断定調に改まり、弱い表現から強い表現へとなる。したがつて、強く断定的な古今伝授書へと変化し、兼良を始祖とした一条流の古今伝授を成立させたのである。

しかし、専修大本により元来の形は伝受者となる教房に敬意を表する為に謙退表現となる〈ならし〉〈なるべし〉を多様した謙虚なものであった。一方で、師匠の不在は〈とぞ〉を用いて偽装することで補い、独自に古今伝授の世界を形成する。以上の行為から、『古今三鳥剪紙伝授』は歌壇における『古今集』注釈または歌道の常識に兼良が対処する契機とした伝授書と位置づけられるのである。

注

- (1) 武井和人氏『一条兼良の書誌的研究 増訂版』おうふう(平成12・11) 初出『古今三鳥剪紙伝授』伝本考——一条流古今伝授の成立をめぐって——』『都大論究』第17号(昭和55・4)。
- (2) 拙稿「古今三鳥剪紙伝授の成長と兼良の注釈精神」『専修国文』第73号(平成15・9)。
- (3) 拙稿「古今三鳥剪紙伝授の本文」『専修国文』第75号(平成16・9)。
- (4) 専修大本の奥書は各拙稿で「御志深に非て」としていたが、「依て」が正しく改める。
- (5) 拙稿「一条兼良古今伝授の成立——専修大学図書館蔵『古今三鳥剪紙伝授』をめぐって——」『専修国文』第71号(平成14・9)。
- (6) 専修大本には一例のみ「名のしれぬ鳥は、皆よふこ鳥なるへし」とある。但し、伝本を詳細に見ると前期成立系統で内閣文庫本と同じく第六類に位置する国文学研究資料館初雁文庫蔵本に「みなよふこ鳥なり」と異同が見られる。
- (7) 田中宗作氏『伊勢物語研究史の研究』桜楓社(昭和40・10)。以下、特に断らない限り寛正三年以前の成立となる初稿本より引用する。
- (8) 『冷泉家時雨亭叢書 第四十一巻 伊勢物語伊勢物語愚見抄』朝日新聞社(平成9・8)。
- (9) 両者の関係が密接であることは、堀内秀晃氏「『伊勢物語愚見抄』と兼良の源氏学」寺本直彦氏編『源氏物語』とその受容』右文書院(昭和59・10)による。中世源氏学の中で九十九髪と源典侍を関連つけた注釈は見受けられず、伊勢物語学の中で兼良から継承する。なお、『花鳥余情』手習「一とせたらぬつくもかみおほかる所に」で九十九髪が用いられている。

- (10) 〈ならし〉が〈なり〉の形容詞形は、築島裕氏「らし」『国文学解釈と鑑賞』第22巻11号(昭和32・11)『平安時代語新論』東京大学出版会(昭和44・6)538頁、吉田金彦氏『上代語助動詞の史的研究』明治書院(昭和48・3)781頁、鎌倉暄子氏「いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について——あらし・けらし・ならしとの関連において——」『文芸と思想』第63号(平成10・2)などを参照。
- (11) 『日本歌学大系 第六巻』風間書房。(143頁)。
- (12) 「解釈が混在」について、根来司氏は〈なり〉とほぼ同じ意味で用いられたのが平安後期からであるが、微々たるもので、〈らし〉的要素が失われるのが、「中世にはいつて急に勢力をえたものようである」とされる。『中世文語の研究』笠間書院(昭和51・2)、初出「疑ひと治定」『国語と国文学』第34巻第9号(昭和32・9)。
- (13) 『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房(昭和45・9)499頁。
- (14) 以下、勅撰集の序文は『新編国歌大観』角川書店による。
- (15) 山口明穂氏『中世国語における文語の研究』明治書院(昭和51・8)115頁、初出「中世文語における助動詞「らし」とその周辺の語」『国語と国文学』第45巻第9号(昭和43・9)。「愚秘抄」の例は「和歌の序の事、(中略)書とゞめには、らし、かも、侍り、となん、か様の詞をおくべきにこそ」(『日本歌学大系 第四巻』風間書房305頁)となる。
- (16) 森野宗明氏「ならし(省約形)」『国文学 6月臨時増刊号』第29巻8号(昭和59・6)。室町時代として『時代別国語大辞典室町時代篇』に「婉曲・詠嘆の気持ちをこめて用いられた」とし、『角川古語大辞典』にも「中世以後、書物の序文に用いられる例などは、一種の謙辞とみることができ」と意味がなされている。

- (17) 日野龍夫氏編輯『荻生徂徠全集18隨筆2』みずず書房(昭和58・3) 85頁。
- (18) 初稿本は伊井春樹氏『松永本花鳥餘情』桜楓社(昭和53・4)、再稿本は中野幸一氏『源氏物語古註釈叢刊第二卷』武蔵野書院(昭和53・12)、献上本は川瀬一馬氏『龍門文庫善本叢刊別編二』勉誠社(昭和61・10)。
- (19) 該当本文のみ内閣文庫本が「業平の事」と独自本文になるので、同類の東京国立博物館本で対校した。
- (20) 荒木浩氏「へなるべし」という表現のこと——〈自記〉と〈他記〉のあわい——『待兼山論叢 文学篇』第28号(平成6・12)。
- (21) 中野氏「草子地攷(一)」「學術研究」第17号(昭和43・12)。
- (22) 「伝受」は『図書寮典籍解題統文学篇』養徳社(昭和25・3)の「授ける相伝と受ける伝受との二要素が必ず存し、この両者は明らかに区別せられた」(177頁)により、「相伝」についても同様に以下用いる。
- (23) 兼良自筆、京都女子大学吉澤文庫蔵本を国文学研究資料館マイクロフィルムより引用。
- (24) 専修大本の「と思ふへしとそ」を、前期・後期系統は「兼好法師もよく知なり哥仙の妙をいはんと徒然草におほめきて書り」(内閣文庫本)と改めている。
- (25) 中野氏「草子地攷(二)」「學術研究」第18号(昭和44・12)。
- (26) 片桐氏『中世古今集注釈書解題三』赤尾照文堂(昭和56・8) 248頁。
- (27) 『補増史料大成 大乘院寺社雜事記三』臨川書店(昭和53・4)。なお、伊井氏『源氏物語注釈書・享受史事典』東京堂書店(平成13・9)も参照した。
- (28) 武井氏「京都国立博物館蔵一条兼良自筆『樵談治要』翻刻——附略解題——」『埼玉大学紀要 教養学部』第37号第2号(平成14・3)。

(29) 大村由己、天正十九年(一五九一)成立。冷泉持為から三代集を学ぶことも記されている。『続群書類従第三十一輯下』(344頁) 原漢文。

(30) 『大日本史料 第八編之十三 後土御門天皇』 東京大学出版会 194頁。

(31) 深津陸夫氏『歌論歌学集成 第十二卷』三弥井書店(平成15・3) 53頁。

(32) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期〔改訂新版〕』風間書房(昭和59・6) 170頁。なお、『嘉吉三年

(一四四三) 前撰政歌合』の時には、兼良・冷泉家と飛鳥井家・二条派とが対立的傾向(141~147頁)にあり、飛鳥井家を中心とする歌壇と兼良との関係が窺える。

(33) 赤瀬信吾氏「一条兼良の古今集注釈」『国語国文』第50巻 第11号(昭和56・11)。奥書の引用は「(3)古今集秘抄乙」に分類された書陵部本(鷹358)による。

【付記】本稿は平成16年度中古文学会秋季大会(於、広島大学)での口答発表をもとに加筆修正をいたしました。司会とご教示を賜りました久保木秀夫先生、会場にてご教示を賜りました武井和人先生、山崎正伸先生に謹んで御礼を申し上げます。